

第八回九州戯曲賞審査員選評

中島かずき

今回から隔年となった九州戯曲賞、一年おいただけあって、その前の数回よりも読み応えのある作品が多かった気がする。

だからなのか、審査会は今までにないほど白熱した議論になった。

最終的には『ハレハレ。』と『末枝の沙果』、そして『戦略的未亡人 みちるさん』の三本を中心に議論が成された。

結論が出そうになりながらひっくり返り、どうやらまとまりそうになったところでまた問題点が出てという状態を繰り返した。しかしそれは極めて建設的な議論の場でもあった。審査員全員が現役の劇作家だ。作品を語るということは結局己を語るということになる。それぞれの審査員が正面から候補作に向かい合い、自分自身の感性と方法論と経験を語り、長い長い論議の果てに、ようやくそれぞれが納得できる結論にたどり着いた。

その結果、守田慎之介さんの『ハレハレ。』が大賞に選ばれることになった。

守田さんは過去何度も最終候補に残っているが、受賞を逸していた。力はあるのだが、大賞を取るにはなにか一つ足りなかったのだろう。今回は、自分の劇団ではなく、高校生達に対して書き下ろした作品だ。その新鮮さがよかったのかもしれない。短いセンテンスで描くなにげない会話のスケッチ、何も語っていないようでいて、しかしその語らない部分で、10代の不安定さや気分を描いているところが心地よかった。

僕が推したのは、瀧本雄老さんの『末枝の沙果』だった。

真っ向からの時代物だ。

戦国時代、ヨーロッパから伝えられた火縄銃を、藩主からの命で、独自に量産しなければならなくなった刀鍛冶、八板金兵衛とそれをとりまく人々の物語である。

物語のベースは、『鉄砲記』という鉄砲伝来の歴史書をもとにしているのだろう。

種子島での日本人による鉄砲製造を、史実や伝承をうまく織り交ぜながら、面白い戯曲に仕上げている。

ただ、歴史をなぞるだけではない。「知の欲求」に抗いきれず火縄銃製造に着手するものの、技術開発がうまく行かず、追い込まれ狂気じみた行動に出る金兵衛と、それに振り

回される周りの人間。支配者側である藩主達の思惑など、複雑な人間関係をうまく人間ドラマに落とし込んでいる。達者なものだ。かなりのレベルに達している。

だが、こういう作品はなかなか賞は取りにくい。

テーマもクリアで、筋立てもはっきりわかる。でも、それはどこか演劇的ではないと思われがちだと、これは自分の皮膚感覚なのだが、どうも、そういう傾向がある気がする。

自分が娯楽志向で、伝奇時代物を多く書いているからこそ、そう肌で感じている。

『末枝の沙果』に関して言えば、こういうわかりやすい面白さは、たとえばこれまでの時代小説や映画など、多ジャンルのエンターテインメントと比較されることになる。その時、どこまで瀧本さんならではの作品世界が作れるか、それが問われることになる。

資料を読み解いて、それを舞台の上で血の通った人物達として立ち上げてその関係を描いていく。その力は充分にあると思う。だからこそ、もう一步先まで進んで欲しい。

最近の若手で、こういうジャンルに挑んでいる作家は少ないので、是非ともがんばってほしい。

市原佐都子

私は『戦略的未亡人 みちるさん』を推した。まず第一印象で気取らなさに好感を持った。

インターネットの中のやりとりを舞台上で生身の俳優に言わせるというところに面白さを感じた。圧倒的に情報量の多い俳優の身体がありながらインターネットの中の薄っぺらな言葉をやりとりさせるその違和感、俳優の特性を無視することで逆に俳優の特性が際立ち、面白い効果を生むのではないかと。

そしてなにより、惹きつけられたのは全体的な、寒さ、にだった。ギャグや言葉選びなどの痛々しく見えるセンス、この心をざわざわさせられる感じがだんだん癖になり、自分だったらこれをどう俳優に言わせたいかということを考えて読んでいた。私の姿勢として、ストーリーや細かいテクニクの部分より、独特のセンスを評価したい。私はこの作品はセンスが良いと思った。しかし、ただ少し気になっていたのは、この寒さは、計算された、そう、戦略的なものなのかということだった。ただまっすぐ滑っているのではないのか、ということだった。ということも考えて、何回か読み、結果的にまっすぐ滑っているのではと思った。そんなことはどうでもいいのかもしれない。

しかし最後の最後、積極的になれなかったのは、きっとこの寒さは、戦略的ではないだろうということと、作者がこの作品で書きたいことは私の受け取ったところとは別にあり、そこを私はあまり良いと感じられていないのではないかという予感があったからだった。また、他の審査員の方が、現代と一昔前のインターネットのやりとりで差がなく全体的にインターネットの表現が古いという指摘に私も共感してしまった。

守田さん、本当におめでとうございます。

桑原裕子

「末枝の沙果」を一番に推し、「ハレハレ。」を弱めに推しました。

最終的にこの二作品のいずれかで審議は難航し、延長戦に持ち込まれるほどに白熱しました。候補作それぞれの良さや弱さを話し合うなかで、個人の嗜好や考え方が一枚ずつ服をはぎ取られるように露わになっていきながら、演劇の将来についてという、私にはやや過分な視点も含めて、大いに迷い、悩みました。

「ハレハレ。」は「嗅がせ上手」な本だと感じました。

台詞には徹底して心境を乗せず、短い会話のやりとりと、ごく自然な人物の出入りで、ゆるやかに動く場の空気をこちらへ”嗅ぎとらせる”づくりが巧み。更に、箆笥の奥にしまった割烹着や、つきたての餅がたてる湯気、遊ぶようにまき散らしたファブリーズなど、全編に具体的な「におい」の仕掛けが施されていて、受験を控えた女子高生の新天地への憧れと、うらはらに今ある場所を失っていくことへの心細さが、かつて自分も体験した嗅覚の記憶から伝わってきます。それらに感傷的な甘ったるさがないところにも惹かれました。

ただ、それらすべてを「嗅がせる」に留まりすぎてはいまいか、というところで、この作品を強く推すことに躊躇いました。美味しそうな鍋が良いにおいを漂わせてるのにずっと蓋を開けてくれない感じ。特別なドラマはなくてもいいから、ひとつぐらい内側にある具を、ぐっと噛んでみたかった。あるいは永遠に煮えない鍋なのかしら？と勘ぐってしまう登場人物たちの「平熱」は、独自のとぼけた味わいがあるものの、登場人物が全員高校生なればこそ、説明がつかぬ熱を帯びたり、唐突にクールになったりする、この世代特有の不安定な面白みを、もうすこし生かしてほしかった、という気がしました。

反して「末枝の沙果」は味つけが濃く、いうなれば油多めのとんこつ風。「知の欲求」という主題を繰り返す台詞もちょっとクドくて胸焼けしてしまうのですが、その味を生み出すまでの労を感じる力作で、火縄銃の発明にとりつかれた鍛冶屋の物語を、力強く描ききった姿勢に感銘を受けました。キャラクターは皆、少々類型的ながらも生き生きした魅力があり、私はいくつかの出会いと別れにほろりと涙しました。

この、嗅ぎとる必要がないほどのわかりやすさは戯曲の欠点になるのか、それを押しても飽きさせない努力はもっと評価されてよいのではないか。こうした点で受賞の行き先が二転三転しましたが、最終的には毎年最終候補に挙がり続ける守田さんの、細やかにディテールを積み上げるたしかな力量と、今後の可能性に期待するかたちで、「ハレハレ。」が受賞することに私も賛成しました。

審査員の「なんだか気になる存在」としてギリギリまで候補に残り続けた「戦略的未亡人 みちるさん」は、主人公が未亡人好きで引きこもりのネカマという、エーヤダ、と思っちゃう設定にもかかわらず、不思議な愛嬌で持たせる力がありました。ほとんどのシーンをインターネットのチャットで構成させる試みだっただけに、都合の良い自分語りなど挟まず、それらもいっそネット上の遊びに組み込んでほしかったです。

「たゆたふ」はあらすじを読んだ時点で最もワクワクした作品でしたが、人工生命体という存在を用いて人権というテーマに言及するならば、その者と人間の共通性（または違い）を、もっと彼らの交流の中で描いたほうが良かったように思います。「同じ」と感じる瞬間があってはじめて、わかりあえない哀しみが生まれるのでは。また、ラストの長台詞でしばしば語られる「怖い」という有機的な感情は、いつミズホに生まれたのでしょうか。

「反復する、イクツカノ時間と、交わる、イクツモノ時間の中で、僕等にできる、イクツカノこと。」は、難解でト書きも不親切、読むのにえらく苦勞しましたが、壁に阻まれた世界で繰り返し同じシーンを行き来するのが、エッシャーのだまし絵に取り込まれるような面白さがありました。何度読んでもさっぱり、という箇所もたくさんあったのですが、演者としてこの戯曲に飛び込み、遊んでみたい気は少し、しました。

初めて審査員なるものを経験し、個性の異なる多彩な戯曲を読むのはうれしいものでした。引き算の美学や、さりげなさこそよし、という風潮におさまらず、これからもそれぞれの色をどんどん伸ばして行ってください。

松井周

全体のレベルは高かったように思いました。作品の世界観が最終的に浮き彫りになることには成功しているという意味で。戯曲は上演されることを前提として読みました。つまり、俳優の身体や空間と掛け合わされた場合のイメージがどこまで膨らむかも考慮しています。

『ハレハレ。』を一番に推しました。「家を出ていくことの不安と期待」「狭いコミュニティのわずらわしさと懐かしさ」を台詞のみに頼ることなく「におい」をモチーフに描くことで成立させていました。例えば、餅つきに使うかっぼうぎのにおいを嫌だと思ってファブリーズをかけたり、いいにおいだと思ったり、気づかなかったりするそれぞれの登場人物たちの行動の書き分けによって、コミュニティに対する心理的な距離が読み取れました。祖父の不在を埋める役割になってしまった主人公がそこを離れるか東京に行くかがドラマと言えばドラマですが、そこは表立ってきません。これは明らかにねらいであり、テキスト上のドラマよりも、上演する上での人間の「存在」、その豊かさにフォーカスしたテキストのように感じました。その「存在」の不可解さ、割り切れなさというところに触れるほどのインパクトがなかったとは思いますが、今作の世界を描くことには特に必要でもなく、非常に高い完成度で成立していると感じました。

『たゆたふ』を二番目に推しました。人工生命と人間がほぼ現在の世界と地続きであるような喫茶店の中で同居していて、その店の人間関係に巻き込まれていくさまが違和感なく描写されていると思いました。後半、別の人工生命が暴走を始めるところからの盛り上がりも面白いのですが、人工生命という「他者」をどう捉えるのかという話よりも、それ以外の人間関係が前に出てきて、人工生命についての話が薄れてきたように感じました。それで終盤にモノログで人工生命本人が自らの来歴を喋っていくのはもったいない。そこで、人工生命は奴隷や家畜なのか？あるいはペットや家族なのか？という問題を浮かび上がらせようとしているのか、急いでまとめに入っているように読めました。人間と人工生命が同居する中でお互いがどのように「他者」を誤解し、あるいは理解するのかをコミュニケーションの中から見出したかったです。ラストの人工生命の「変身」は予想を裏切るもので、心を打たれました。

『末枝の沙果』は一読して面白く、二度目も面白かったのですが、これは何の面白さだろうと思いました。種子島に鉄砲が伝来した史実をもとに、鍛冶屋の家族が大名の命令に翻弄されていくのと同時に、ものづくりへの狂気に似た欲求に突き動かされる様子が、ス

トリーとしてきちんと整理されて描かれているので、読んでいて飽きなかったです。全体的に登場人物たちの台詞が過不足なく心情や状況を語っているのですが、ストーリーを進めるためのコマのように思えて、「存在」の重さを感じきれませんでした。上演すれば違うのかもしれませんが、それほど言葉が先行して説明しているように思えるのです。また、テーマである禁断の知恵の実としての「末枝の沙果」の説明が登場人物たちの行動を説明しきっていたりと、こちらが想像力を発揮する自由が封じられているような窮屈さを感じました。ラストの「転生」のようなシーンは作者の筆力の高さを感じられるものでした。

『戦略的未亡人 みちるさん』ネットの書き込みの連続を生身の身体がやることの面白さがわかりにくかったです。生身の身体の情報の方が多いため、それを逆手に取るとしたら、ネットの「ノリ」に対する生身からのツッコミが仕掛けとしてほしかった気がします。自称 18 歳のイチゴ姫の正体が 42 歳のニートだとバレたとしても、台詞の上でのことなので、生身はどんな身体なのかどんな環境で暮らしているのか垣間見たいというか。ただ、時間を越えて家族が集合するというか、合体していくような展開は予想を越えて面白かったです。墮落林はなお先生の小説の内容にもっと主人公が巻き込まれていくとどうなるんだろう？というこの先の展開が知りたかったかもです。

『反復する、イクツカノ時間と、交わる、イクツモノ時間の中で、僕等にできる、イクツカノこと。』空間と時間を使って、その場で起きることと歴史の中のできごとを重ね合わせることを表現しようとした挑戦的な作品でした。しかし、コンセプトの意図がつかみづらく、言葉がばら撒かれすぎていて、登場人物やその関係性を理解するのが難しかったです。演劇の世界での「演出家様」と歴史上の悲劇における「神様」の不在についての台詞(?)が繰り返されるシーンの反復にスケールの大きさを感じましたが、やはり全体のイメージがぼんやりとしていて、強力ではなかったかもしれません。言葉でイメージを縮減することにも挑戦して欲しいと思いました。

佐藤信

面白かった。最終選考に残った五作品を読みながらの感想です。面白かった。7月21日、五人の最終審査員が集まって、わいわいがやがや議論した審査会の感想です。面白かった。

審査会のあとの授賞式と飲み会の感想です。応募者のみなさんと一緒になって、いろんな話をいっぱいしました。

ぼくは戯曲を書きますが、劇作家ではありません。ぼくは芝居やなにやかや、いろいろな舞台の演出をしますが、演出家でもありません。でもいちいちめんどうなので、世間での肩書は妥協してそのままにしてあります。ほんとうは、半世紀あまり、劇場と呼ばれる怪しげな界限にへばりついて、ひたすら遊びほうけてきたただの愚か者です。九州戯曲賞の審査員などという大それた役目を引き受けたのは、何だか面白そうという予感とでも言うしかありません。予感はぴしゃりと当たりました。めでたしめでたし、と締めたいところですが、最後のお役目が残っています。ささやかな戯言です。

台本があります。戯曲もあります。生の舞台のために書かれたテキストである限り（あるいは実際に舞台上で上演されるテキストである限り）、それは「散文」ではなく「詩」だとぼくは思っています。演者が他人の言葉（「詩」）を喋る（あるいは歌う）、それが芝居だ、というのがぼくの偏見です。偏見だとはわかっていますが、ぼくはこの立場をゆずりません。「詩」とはつまるところ文体です。普段の会話の引き写しでもなく、手紙や日記のような書き言葉でもなく、人が「物語」や「夢」や「思いのたけ」を語る言葉。その言葉には作者自身の文体が必要です。

難しいことではありません。今回の候補作、米田翔太さんの『戦略的未亡人 みちるさん』、この題名がぼくの思う「詩」です。そして文体です。ネットの匿名性という時代ならではの題材を、「おたく」世代の湿りけを逃れて、さわやかにまとめた作者の「詩」ところが好きです。支持します。

瀧本雄壺さん『末枝の沙果』は、まっとうな時代劇という選択が「詩」でした。審査員のひとり、中島かずきさんの熱烈な支持もそこにあったと思います。願わくば、その「詩」に見合う文体をもっともっと磨き上げて下さい。優れた先人のもの真似でもちっとも構いません。次回作への期待大です。

福田修志さんの『たゆたふ』も題名がいい。小さな田舎町に「生きる」人工生命体という設定も、「うわお！」です。小さな「物語」へのこだわりを捨てて、作者自身の「夢」への羽ばたきへあと一步。惜しい。

『反復する、イクツカノ時間と、交わる、イクツモノ時間の中で、僕等にできる、イクツカノこと。』の作者、石田聖也さんへ。「イクツカノ時間」、「イクツモノ時間」、とせっかくたたみかけたのに、最後の「イクツカノこと」という身の丈にあわせてまとまりへ

の回帰が残念。「僕等にできる、××××ノこと」の××××にふさわしい言葉、是非、見つけて欲しいと思いました。無いものねだりでは決してないはずです。

受賞作『ハレハレ。』。蒸かしたもち米のにおいと、階下からのペッタンペッタンという杵の音。かもし出される演劇的な光景を想像すると、「詩」とか「文体」とかの小理屈も、ちょっと脇においておきたいような気持ちになります。このテキストを演じた高校生たちは、きっと幸せだったでしょう。守田慎之介さん、おめでとうございます。